

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(29)

中村周平

今回は、ここ一年近くで私自身が経験した「首の痛み」について書かせていただこうと思います。そして、その痛みを経験したことで思い出した過去のエピソードや、首の痛みによってこれまでのPC操作ができなくなったこと、新たな操作方法の模索などについて触れていきたいと思います。

昨年の2017年8月頃、最初の症状は腹部の筋肉の震えでした。以前にも書かせていただいたことですが、ラグビーの事故によって頸髄を損傷した私は、胸から下が動かない「四肢体幹機能」に麻痺が残る障害を負いました。簡単に言ってしまうと、身体を動かそうと思っても動かさない状態になりました。その代わりにというのはおかしいかもしれませんが、いわゆる「不随運動」と呼ばれる症状が身体に現れるようになりました。私はこの症状を「痙性」と呼んでいます。

同じ頸髄損傷の方でも「痙性」が現れるタイミングや条件は異なりますが、私の場合、「筋肉に急激な刺激があった」、または「身体に何かしらの異常や痛みがあった」、この2つが主な要因でした。前者については、受傷15年という経験からストレッチ運

動をこまめに行うことで発生を防いだり、逆に血流を良くする為に意図的に起こす（例えば、ある一定の方向に足を伸ばしたりする）など、私自身がある程度「痙性」をコントロールすることが可能でした。

しかし、厄介なのが後者の場合です。これは補足説明になりますが…。頸髄損傷の症状の1つに痛覚や温覚、冷覚といった感覚を感知しにくくなる、知覚神経障害というものがあります。この痛みや熱さ、冷たさなどを感知する機能は私たち人間にとって、普段とは異なる身体の状態、つまり身体の異常を知らせてくれる非常に重要な役割を果たしてくれています。この身体が知らせてくれる痛みという信号を感知できることで、怪我や病気の早期発見・早期治療を行うことが可能となります。頸髄損傷の方の褥瘡（血流が悪くなることで皮膚の細胞が壊疽してしまう二次障害）が悪化しやすい現状の背景には、痛みなどの信号を感知することが困難なために発見が遅れることが理由の一つとして挙げられます。

話を本筋に戻します。私にとって筋肉が刺激を受けること以外に「痙性」が発生する要因として、身体の異常や痛みが挙げられるものの、その異常や痛

み自体を感知出来ない為に、「痙性が起きている理由
は分からない。ただ、筋肉の刺激で起きているもの
とは違うように思う。なので、身体のどこかに異常
や痛みがあって痙性が起きているのではないか。断
定ができない理由は、私自身が痛みを感知できない
から」という、非常に曖昧で納得しづらい答えを無
理矢理飲み込むしかありませんでした。ただ、幸い
なことに受傷15年間で幾度となく発生した「異常
や痛みから起きているであろう『痙性』」は、時間の
経過とともに症状が消失していきました。また、中
には明らかにこの怪我が理由であろうという視覚的
な根拠（裂傷や火傷等）が発見され、それが回復す
る過程で症状が治まっていくことも。なので、今回
腹部に現れた震えも、日にち薬的なものであろうと
楽観視していました。

しかし、腹部の震えはいつまで経っても回復しな
いどころか、身体のあちこちに別の症状が現れ始め
ました。顔の右半分のみでの発汗、右上肢の体温の低
下、右肩甲骨周辺の痛み、その範囲や汗、痛みの程
度は日に日に増していきました。とくに、発汗の症
状は夏場のエアコン事情と相俟って、急激に体温を
下げてしまい、体調を崩す原因にもなりました。そ
して、最終的に首周辺の筋肉に激痛が走り、身体が
後ろに反り返るような背筋の震えなどが起き始めま
した。

「どう考えてもこの症状や痛みは普通じゃない。
これまで経験してきたものとも違う気がする。でも、
原因が全く分からない」

これまで経験したことのない症状と、原因が分か
らないことへのストレスを抱えたまま、2週間が過
ぎようとしていました。